



Title	経済哲學えの道(二部)
Author(s)	永田, 正
Citation	政経論叢, 19(2): 104-131
URL	http://hdl.handle.net/10291/12085
Rights	
Issue Date	1950-10-20
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

經濟哲學への道 (二部)

永田正

各論

第二章 自然と人生

第一節 自然

如何なる科學の研究でも、人と自然との關係にあることに異論はないであらう。この場合常に問題となることは、人と自然とが對立的に考えられて、或時は主體と客體、又或時は認識するものと認識されるもの、即ち對象などの如く表言されていることである。ところで主體でありそして認識するという人間自體は、或る意味では自然の中にあつて一般に肉體的のものとして萬物の中の一物であるということが出来るのである。一物である人そのものが自然の中

にありながら、自己以外の萬物を對象として即ち、人以外の萬物を靜的に又は動的に最も擴い意味での自然又は自然現象としてこれ等を研究していることからして、古來種々様々の思想や學説が生づるのであつて、又それ故に人間は萬物の靈長といわれ、又は神の子という言葉も用いられてくるのである。この現實から人以外のものと、人との相違は何であるかということが當然考えられねばならぬ。この意味で先づわれわれは自然ということを出來るだけ深く考えねばならぬ。しかも人は自然の中にあるという立場からして、人は神の子で自然から超越していると考えられ、それ故に肉體的人間は自然の中にありその人間の中に精神が宿つていて、即ち神の子として萬物を支配していると考えられて居たのが、古代の思想であつたといえよう。又そのことが哲學的に色々の觀念論が論じられ、今日までもそれが凡ゆる形で表言されていると考えられる。

自然という語によつて表わされている概念は種々の意味をもつてゐるが、先づ自然という概念は文化という概念に對立せしめられる。従つてこれを文化という概念と比較しつゝ規定することが最も理解しやすいであらうと思う。自然の生産物は自然的に、換言すれば人の手を借りずに獨りで成長していくのである。この意味で極めて平易な表言を用いると、自然とは靜的には「ありのままのもの」をいふ、動的には人の手を借りずに變化していく現象をさしているということが出来る。山川草木の姿そのまゝの如きを自然というのである。これに反して文化の生産物は人が土地を耕したり種を蒔いたり驅虫、施肥等を行つたりすることによつて土地から生ずるものである。英語の Culture はよくこれを表わしている。人間が自然を開拓することが其の意味であると思う。例えば田に作る稻や温室又は畑に栽培する葡萄の如きものである。文化は何等かの價值ありと認められた目的に従つて行動する所の人の手によつて生

産されたものである。この場合靜的には文化財といふ、動的に見て文化現象という言葉が用いられる。

要するに自然は價值に關係なしに即ち没價值的に觀察さるゝものであり、又かくの如く觀察されねばならぬものである。文化は必ず價值が結び付いてゐる。而してわれわれはその價值を文化價值といふ、この價值に充ちたものを文化財と呼ぶのである。自然は價值と結合してゐないものであつて、もしわれわれが或る文化財から凡ての價值を除き去るならば、その對象は單なる自然となるであらう。例えば野原の一本松を繪に畫けばその繪は文化價值を存し、又その松自身も之を美的自然として觀る場合には美的價值の擔有者となるのである。又薪屋がこれに勞働を加えて運搬して薪割で薪にすれば經濟財として經濟價值あるものとなる。この松から美的價值、經濟價值を除き去るならば、それは單なる一個の自然物に過ぎなくなる。つまり文化價值に關係せしめてわれわれが觀るか否かによつて、同一對象を二つの異なるものとして即ち文化及び自然として區別することが出来るのである。

われわれが大自然の中にありながら、われわれ以外の凡てを對象としてのわれわれの觀點によつて自然と文化という二種の對象の區別が認められてゐる限り、この對立が、科學分類の基礎となつてゐるといふことは容易に理解される。道徳、宗教、法律、國家、科學、風習、言語、藝術は何れも文化財であり、之等に關する研究は即ち文化科學である。何となれば之等のものに附着してゐる價值が社會の各方面から妥當なるものとして認められてゐるからであり又之等のものは夫々自身の價值の是認を社會に對して要求してゐるからである。而して文化價值に關係なき對象、即ち没價值的對象に關する科學は自然科學ということになる。物理的現象、化學的現象等の如きは、それ自身としては何等の文化價值をも擔有せざるものであり、物理學や化學は自然科學の最も代表的なものである。然し科學と呼ぶ

ゝものの中には自然科学と文化科學の何れに屬するか容易に判明しない様に思われるものが少くない。例えば地理學や人類學の如きは之である。かゝる問題は之等の科學がその對象を如何なる觀點から考察するかによつて決定される。註1

勿論科學の分類ということについては學者に依つて多種多様の分類法が行われている。例えば W. Wundt の如きは、純粹數學は只抽象的なる純粹形式のみを對象とする形式的科學として實質的科學から區別され、實質科學は明確に自然科学と精神科學とに分けられるとしている。註2 而して自然科学は間接經驗の學にして經驗の主體たる主觀から隔離せしめられたる被經驗的客體即ち經驗内容として與えられたる客觀を對象として研究するものである。之に反して精神科學は直接經驗の學にして經驗内容を把握する主體たる主觀を對象とする。註3 又 A. Messer は人自體の頭中にある觀念そのものを研究せんとする學と、人以外のものを大別して實在科學と觀念科學の二部門に區別してゐる。註4 然るに W. Wunderband 及び H. Rickert は W. Wundt の研究對象の差異によつて自然科学と精神科學とに分類することに反對して、科學の分類は各科學がそれぞれ目標とするところの認識目的の形式上の特質に従つて生ずる研究方法の相異を以てその區分原理とした。Rickert の「文化科學と自然科学」に於いて述ぶるところを見ると、自然科学をば「一般科學 Generalsierende Wissenschaft 即ち一般化を手續とする科學、現實的感官世界の認識に關して更に他の一つの手續による科學の成立が可能である。註5

このように學者の説にも多種多様に各々の見解からして自然と人との間の區別が論じられているのであるが、結局は自然というのはわれわれが、われわれ自身の意圖又は意欲を出来るだけ除いて、たゞ在りのまゝの姿や動きを觀察

によつて見る場合の諸對象を表わす言葉である。このようなわれわれの状態を指して知の世界としてしているのである。われわれは此の知の世界の代表的なものを物理學者の研究態度に見出すことが出来る。特に物理學なるものもわれわれが一般に物理學と呼んでいる所の實驗物理學をいうのではない。電子に基く自然現象の物理的解明は、われわれの實際的經驗に依らざる假設的要素を以て構成した數學的理論に基くものであつて、之は經驗に訴える所の實驗物理學に依つて行わるゝものでなくして理論物理學と呼ぶるゝものを以て行われるのである。即ち現在ノーベル賞を戴いた湯川博士を生み出した原子物理學 (Atom Physics) である。こゝで最も注意すべきは現代の諸科學のみならず凡ゆる學問研究の對象が、すべて「動的」に行われて來た事である。われわれが日常經驗するこの現象世界の事物即ち森羅萬象は、無限にして複雑多様常に變化し絶えず生滅流轉して停止する所を知らざる有様である。之を時間的に見るに吾人はその始めを知らず又終りを知らず、空間的に見る何れの方向にも無限の延長を有するものゝ如く、其の極まる所を知るよしもない。かくて經驗科學の對象たるこの現實の世界はわれわれにとつて無限の擴りを有する一體とも解することも出来る。われわれが簡單に同一物と呼びなれているものも決して常に正確に同一の状態を繼續するものではなく、時々刻々間斷なく變化し推移するものである。或は一見して同一又は不變の事象と見ゆるものも之を精細に點檢し觀察する時は、そこに必ず差別と相異と變化が窺われる。又不確實なるわれわれの感官には一樣等價と見ゆる事物も、精密なる機械力に依る時は驚くべき多様と異質を呈する研究に於いて一切を動的に認識して行かなければならないということである。即ち絶對永久不變の眞理などは求められるものではないということである。いまこの事について權威ある自然科學者の著書により自然の動的な研究を觀ることにする。現今これ等動的の物理學の研究は極

度に發達して遂には自然科學と文化科學の區別をも否定する所まで進み新しい唯物史觀の見解が唱えられるまでに至つたのである。

石原純先生は「自然科學の諸部門に於いて現象間の關係を最も深く論理的に分析することのできたのは物理學であることは周知の通りである。之は物理學で取扱う物質現象がその他のものに比して最も簡單であるのに由るが。ともかくもわれわれはそこで自然のなかから精密な數量的關係を抽象し且つ之等を論理的に整序することに或る程度まで成功したのであつて、之が前述の如き意味での自然科學世界像の可能性をわれわれに啓示したのである。従つてこの事から物理學的世界像が一般の自然科學的世界像の花型であり得ることは確かである」。と理論物理學の重要性を説いておられる。尙又「物質の要素的粒子がすべて帶電體であることが發見されたときに、すべて物質現象は電磁氣的に解釋すべきであるとせられ、こゝに電磁氣自然觀が稱えられた。(中略)電磁氣力は單に物體に所屬する一種の力に外ならないのであり、電磁的質量と力學的質量とを區別することはもはや無意味と見られるに至つた。」註6 と述べられておられる。即ち自然科學的世界像即ち電磁的世界像而してそれは力學的的世界像であつて大自然の動的認識を思わすものである。

然し森羅萬象複雑な現象に對して完全なる力學的説明だけで満足出来るものではない。そこで石原先生は次の如く説かれる。「かような場合には何等かの力學的類推をもつて満足するより外はなかつた。光に對して彈性媒質としてエーテルを假定し、又熱や電氣を一種の流體として論じようとしたのは何れも此の類である。」尙又「物質原子間の物化學的親和力の如きは、最初は力學的類推に於て一種の力として考えられたのであるが、この力の本質的説明はな

ほ不可能であつたのに反して、エネルギー論に於ては之を全く熱力學的に考察してその數量的記述を可能ならしめたことなどその一つの功績をものがたるものである。」註7

かくの如くわれわれが常識的に感官のみで一見して無數の姿をして存在していると見る諸物も、何か唯一の原質を求めんとする哲學的要請からして研究に研究して行く自然科学者達の努力の結果は、分子が唱えられ原子が発見され電子に深く進み、今日ではエーテルとかエネルギーの一種の動的因となる力というところまで進んで來たのである。

素朴的唯物論からその靜的理論の點點を見出し今日の唯物史觀をマルクスと共に強張しているエンゲルスは自然科学に於ける發展の經路を明かにし次の如くのべている。

「カントの星雲説はすでに太陽系の發生を、また彼の地球廻轉の海潮による妨害の發見にまた太陽系の没落をも宣言した。……(しかもその後の自然科学の進歩は)舊來の固定した對立、越えがたい境界線をだん／＼と消して行く。最後の氣體さえも液體化され、一個の物體が液體的ともガス體的とも區別のつかない状態におかれることが證明されて以來、凝集狀態はその舊來の絶對的特性の最後の殘滓をも失つてしまつた。完全なガスにおいては個々のガス分子の運動する速度の自乗は、同一温度の下では分子の重量と逆比例するというガス分子運動理論の命題によつて熱もまた直接然るものとしてはかりうる運動形態の列に入る。十年前に新に發見された運動の大原則はまたエネルギー保存に關する單なる法則として、運動の不滅性と創造不可能性との單なる表現として、即ち單にその量的方面から把握されたとすれば、このせまい消極的表現はエネルギーの變化という積極的な表現によつてますます驅逐され、こゝにはじめて過程の質的内容はその所を得、またこゝに世界の外にある創造者に對する最後の記憶が消滅するのであ

る。運動（いわゆるエネルギー）の量は、それが運動のエネルギー（いわゆる力學的力）から電氣、熱、位置の潜在的エネルギー等に轉換するときにも、またその反對の場合にも變化はしないということは、今ではもはや、新らしいこととして説かれる必要はない。……そして生物學が進化論の光によつて研究されるようになって以來、有機的自然的領域においては分類の固定的境界線はつきつきに解消した。今では卵を産む哺乳動物もおれば、四足で歩く鳥もいる。すでに數年前ヴェイルヨウが細胞發見の結果、動物的個體という單位を細胞國家の連合にまで解消することを餘儀なくされたとすれば、動物的（したがつてまた人間的）個性の概念もアミーバのように高等動物の體內をはいまわつてゐる白血球の發見によつてなおはるかに複雑化する。すべての對立と區分とは單に相對的な妥當性をもつものであるにすぎず、固定性と絶對妥當性との觀念は我々の反省によつて自然の中にもちこまれたものであるにすぎない。——この認識こそ自然の辯證法的把握の核心を形づくるものである。人は自然科学の集積されゆく事實に強制されることによつてこの認識に達することができる。」註。

武谷三男先生は其の著書「科學、哲學、藝術」の中で、「原子物理學への期待」の見出しのもとに「人類は遂に原子そのものの中にひそむエネルギーをとり出し、これを自由にすることに成功した。即ち原子力の解放である……今から五十年前前に電子という原子よりもつと小さい單位が發見された。それと共にギリシヤ以來考えられていた原子が物質をつくり上げてゐる窮極の單位であるという考えはこわれてしまつた。そして原子は電子からつくられてゐる事になつた。しかしそれで十分でなかつた。一九一一年原子は眞中に重い原子核があり、周りに軽い電子がとびまわつてゐることが分つた。そしてそれ以前に發見されていたあのキュウリー夫人のラジウムの放射能は原子核の現象

であり、原子核は大きなエネルギーをたくわえている事が考えられた。(中略)一九三一年中性子が發見された……こうして原子核は陽子と中性子とから出來上つてゐることがわかつた。……一九三五年湯川博士はこの原子核の中で中性子と陽子とむすびつける力として中間子を導入した。」註9

エンゲルスはこの自然や物質ということに就いて彼のフオイエルバツハ論で哲學的思考により次の如く論じている。「すべての哲學、殊に近代の哲學の大なる根本問題は、思性と實有との關係の問題である。……精神と自然といづれが本源的かというこの問題に對する答え方について哲學者は二大陣營に分裂した。自然に對する精神の本源を主張し、したがつて結局において何らかの種類の宇宙創造を認容した人々は觀念論の陣營に構成した。それに反して自然を本源的なものと見た人々は唯物物の種々の流派に屬している。」と前提し、彼はフオイエルバツハの唯物論の立場を明らかにして

「フオイエルバツハの發展道程は一人のヘーゲル主義者の唯物論に至るまでの發展道程である。即ちこの發展は一定の段階に達するとヘーゲルの觀念論的體系と全然絶縁することを必然とするものである。ついにフオイエルバツハは抵抗すべからざる力にせまられて反應なしに次の見解をとるに至つた。いわく、ヘーゲルのいわゆる「絶對觀念の先世界的存在、即ち『論理的範疇の先在』なるものは、超世界的創造主に對する信仰の空想的遺物に外ならぬ。吾々自身が屬してゐるところの實在的な、感官によつて知覺することの出來る世界が唯一の實在であつて、吾々の意識と思性とはいかに超感覺的なものに見えようと一つ實在的、肉體的器官たる頭腦の所産にすぎぬ。物質が精神の所産でなく、精神そのものが物質の最高所産にほかならぬ。」註10

これがフオイエルバツハの唯物論であるが、マルクス、

エンゲルスは、フオイエルバツハが唯物論をヘーゲルを通して單~~に~~自然を物質現象として見るばかりでなく、人間の歴史的现象をも同様に唯物論的に見たのを土臺として更に史的唯物論として具體化するに至つた。即ち一切の人間の歴史の最初の前提はいうまでもなく生きた人間の個人の生存である。これらの個人のよつてもつて動物から區別される所以の最初の歴史的行動は、彼らが思性するということではなく、却つて彼らが彼らの生活資料を生産しはじめるということである。それ故にたしかめらるべき最初の事態はこれらの個人の肉體的組織と、これらの自然的諸基礎、及び歴史の過程における人間の行動によるそれらの諸基礎の變化から出發しなければならぬ。」註11

十七世紀末ニュートンの物理學が最高であるとされ、ラメトリーが「人間機械論」を書いた時代までは地球の發展史を明かにする地質學も起らず、科學性をもつた生物進化の觀念もない時代の唯物論が、變化あり、進化あり、進歩する世界を無目的機械的の唯物論となつて、觀念論者に反撃されたのも無理のないことであつた。彼らはこの自然における個々の物についてはたゞこれ等を靜的に弧立したものを、機械の諸部分の如きものとしてのみ把握し、したがつて運動をば各々の物質的存在そのものに内在するものとしてみとめることができなかつた。

森羅萬象一切を何か個立的のもの、一元論といわれる靜的個物としての原質のみとらわれている古い唯物論と現代の唯物史觀を混同している場合が相當の學識ある人々にも多いようである。この事は特に武谷氏などが注意している。馬場恒吾氏が昭和二十五年の一月一日の讀賣新聞「年頭展望」に「原子爆彈は廣島と長崎を爆破すると同時に、今までの世界觀をも爆發した。原子理論の發展は物質は固定しているということを前提とするニュートンの因果律とそれと同時代に生れた唯物史觀に修正を強要する。」云々の記事に對して強く反ばくして居る。即ち、「唯物史觀が辯

證法によつてゐることを知らないものであろうか。

辯證法は機械的運命觀を批判するものであることも周知である。唯物史觀こそ流動する世界、原子の分裂、物質の流動を主張してゐるのである。(中略)馬場氏は原子爆彈が如何なる物質の法則によつてゐるか御存じであらうか。それは辯證法的因果性を根本とする量子力學によつてゐるのだ。

以上は一般にいわれているザインとしての自然並びに自然現象とか尙宇宙とか世界像的の意味で考へて來たのであるが、併しこの自然とわれわれ人間との關係を含めて考へる場合に從來學者はザインとして自然に對してゾルレンの世界という表言をとつて來てゐる様に思われる。分り易くいうならば世界というのは人間が人間自身を主體として外界を意味づけて見た場合の自然を世界といつてゐると理解される。このようにして見る場合に自然科學とは別に世界觀とか人生觀という言葉が表われ、而して世界像とか人間學というものと區別されることになるのである。哲學は人間觀であり又世界觀である。自然科學は人間とか自然を沒價値的のザインとしての學とされてゐるのである。けれどもこの自然科學と精神科學(又は文化科學)という從來の區別に對して、唯物史觀の立場からしてその必要がないとされて來てゐることにわれわれは注意し、このことについては大いに研究する必要があると思う。武谷氏は原子力の思想的意義と題して「原子力が思想的に何を齎したかという問題に就いて考へてみると、それはザインとゾルレンの分離に對して一つの決定的なピリオドを興えたということだ」といふ、その最後のところに「眞實のマルキシズムはザインとゾルレンの分離というのでなしにいちおうザインとゾルレンをカント的に批判し、然るのちにもつと完全な形でザインとゾルレンを統一した立場に立つてゐる。ザインとゾルレンを分離して別の世界、二つの世界とす

うふうに扱うのではなくして、ザインの地盤からゾルレンがザインの自己發展として出てくる。そういうのがマルキシズムの觀方である」註12と論じている。たしかにレーニンは「唯物論が觀念論哲學と根本的に異なる點は唯物論者が感覺、知覺、表象——一般に人間の意識を客觀的實在の模寫と認める點にある。世界はこれ等客觀的實在の運動であつて、これがわれわれの意識に反映する。表象、知覺の運動はわれわれの外界にある物質の運動に對應する。物質という概念はわれわれの感覺に與えられたる客觀的實在以外の何ものをも表わすものではない」註13と述べているのであるが、現今ソ聯の百科辭典になつて來ると物質の概念が大いに違つて來た「哲學上の物質の概念は自然科學上の概念とは切つても切れない關係を有する。それは現代自然科學の物質觀を普遍化したものである。……およそ唯物論は物質を客觀的實在として認めて來た。しかし物質の多種多様な運動形態の研究に立脚して物質の物理學的規定の缺陷を明らかにし、哲學上の物質概念にまで到達したのはひとり辯證法的唯物論のみであつた。哲學上の物質概念は、個別科學の研究對象たる客觀的實在のあらゆる具體的形態の概念を含んでいる。雄大な天文學的體系も、微粒子も原子も電子もそのすべてが客觀的實在である。生産力、生産關係、階級というような社會的存在形式もまた同様に客觀的實在である。個々の物質を離れて具體的な物質構成の他になほ「物質そのもの」、「第一物質」があると考えるのは誤つてゐる」と載せている。註14、

自然科學者でない、又數學者でも理論物理學者でもない私が、物質とか自然とかいうことについてこれ以上述べることは餘りにも危険のことである。只私は學問といおうと、科學であろうと、人間と自然との關係からして生ずるもの又は現象を研究するのであるから、何よりも先づ自然と人間という言葉の概念を完全とまではいかないにしても理

解しなければならぬと思うが故に特に權威ある自然科学者である石原先生と最近廣く唯物史觀を理論物理学に結びつけ、辯證法による自然科学の研究を實行していられる武谷先生との著書を拜讀することにしたのである。私が學生時代から教えられたこと又其後研究した範圍に於いては、やはり研究の便宜上からして自然科学と精神科學との區別は必要であると思う。然しそれはあくまでも便宜上のことであつて、兩科學には其の實體を追求する時に必ず統一されるかさもなければ何物かによつて關係づけられるべきであると思われる。何故かなれば、それは兩科學共に大自然の中にあり而も人間を通して見られているからである。

第二節 人 生

すべての問題の出發點は人間は何であるか？である。人間こそ複雑極まりなきものである。それは萬物の靈長といわれる程に古來非常に多くの解釋がなされているのである。若しも自然科学的にダーウキンの進化論的解釋をしたとしても人間は幾億年の時間を経て進化し最高度の發達をした有機體である。凡ゆる植物、多種多様の動物、且今日では礦物性のものをも飲食して生活して來た限りなき觀念を生み出す頭腦の所有者が人間である。しかし人間を只生物學的に動物的に見るならば、それは最高度に進化發達した有機體というより外はない。之を其の起源の問題を別にして現實の他動植物と區別される所謂精神的存在としてみるならば、人格と表言されて他動物とは全く異なるものである。哲學辭典をみると「人間の本质に就いては古來思想家の間に種々の見解がある。アリストテレスは人間を政治的即ち社會的存在と考へ、ユダヤ教キリスト教は神の似姿となし、スコラ哲學に於ては人間の本质を理性に求めた。又

人間を宇宙の要素と方の聚積、宇宙の模倣となし、小宇宙と呼んだ哲學者も少くない。カントは現象としての人間と本體としての人間とを區別した。又個々の人間を超えた人間性そのもの、或は總體としての人類の内に人間の本質價値を見んとするものにフイヒテ、ゲーテ等あり、純粹人間性の理念を道德的社會的規範と説くものにコウエン、ナトルプ、ヴント、ジンメル等がある。更に近時人間の生存 (Dasein) を他の存在 (Sein) に對して存在論的優先を有すると考へて其現象學的分析を試みるものにハイデツゲルがあり、又諸々の文化現象を人間の本質的構造から理解せんとして哲學的人間學 (Philosophische Anthropologie) を建設せんとした者シェーレルがある。「如何に人間觀の多種多様であるかも明かである。尙シエラーの有名な論文「人間と歴史」を開いてみよう。彼は歴史的背景を持ち、史觀と結び付けて五つの類型を與えている。

第一は有神論的人間觀である。これは哲學や科學が未だ論じられない時代の人間觀である。このような人間觀は一種の神話で現代の哲學や科學に對しては無意義であるといえる。併し文學とか哲學の地盤として大いに有意義であるといえよう。

第二ホモ・サピエンス (homo sapiens) 叡智人の人間觀である。これは哲學の發生地であるギリシヤ人が唱へたものであつて、哲學的に人間を解釋したものと見える。「人間は理性的動物なり」とか又は「人間は哲學的動物なり」という古典的定義はこの人間觀を表わしているものといえる。

第三ホモ・ファアベル (homo faber) 工作人の人間觀である。ホモ・サピエンスの理論は人間と他動物とを根本的に區別したが、ホモ・ファアベルのそれは人間と動物とに本質的區別がなく程度之差にすぎないと考へる。人間は

類人猿に見られる心理的能力が一層發達したものに過ぎない。神的とか先天的の理性の如きものを否定、只腦髓の如き多量のエネルギーを有している衝動的な存在で、工作力によつて道具をもつ動物であると解釋されるのである。近頃の衝動心理學者達がこの理念を支持している。ホツプスやマキアベリの如し。

第四、前述の三理論は各々異つていながら何れも人間を調和的、建設的、創造的の意味で見ているのであるが、第四の人間觀は不調和的、破壊的、退化的の本質及び根源を有するものとみな人間觀である。東洋哲學でいう性惡説の如きものであろう。この人間觀によれば、人間とは第一に生命一般の袋小路であり、第二に一般的に精神病であるといふのである。悩み、不幸の人生をみているのであろう。「知多ければ悩み多し。」といふことになるか。

第五は超人の人間觀である。これはニーチエの超人の思想に見出される。人間の獨立と自由の高昇を叫び「神は死せり」それは「超人が生きている。」とのニーチエの言葉の中に表わされている。註15

第三節 自然と人生との關係

(一)に於いて感官的、ザインとしての自然という言葉に就いて述べ、(二)に於いては人間と他動物とを區別して人間觀を論じて來たのであるが、ザインとしての自然科学の對象としての即ち没價値的の意味での自然を人間觀を通しての見方即ち世界觀について考えて見たいと思う。何故なればこの事は政治・經濟は勿論の事、藝術、宗教等の學のみならず社會において勞働している凡ての階級の人々が自らの職域を即ち義務を果すには必ず世界觀を有していると信ずるからである。自由主義にしても、社會主義にしても、そして又共產主義にしても何れのイズムを守るとしても

それは一の世界観があるにちがいない。イズムに捕われるのではない。國民多數の輿論に従つて政治を行うという民主主義であつても、その輿論を形成する各人民は各々の世界観があればこそ政治も行われるのである。例えニヒリストにしても、アナキストにしても、それはそれとしてのやはり世界観ということが出来るのである。世界観という言葉をしらべてみよう。岩波の哲學辭典によると「一般には世界を一つの統一的全體として見てその意義や價值に関する見解。その意義や價值が特に善美、善惡、合規範反規範という見地から問題とされること多く此倫理的意味から云えば厭世觀、樂天觀、改善觀の三様がある。人生についての統一的觀方なる人生觀を密接な關係がある。」註17 と述べられている。われわれは厭世觀としてはショーペンハウエル、樂天觀としてはシャフツペリやライブニッツを、そして改善觀としてジェイムスを思い出すことができる。又われわれは日常生活に於ける各々の行き方からして次の三つの人生觀が生れるともいえる。

第一に自然主義である。人間は自然によつて規定されている。そして人は自然に隸屬している。このような考え方は宗教家や文學家に現われるが、哲學に於いて現れるときに自然主義と稱している。遠くはデモクリトスやプロタゴラスから、近くはヒニムやフオイエルバツハ等の思想などをあげることが出来る。一般に唯物論者に多い。

第二は自由の觀念論である。これは人間意思の自由より出發し、自然に對する精神の獨立尊嚴を主張する。自然主義に於いては精神も物理的に説明されるのであるが、自由の觀念論に於いては精神は自己が物理的因果から獨立であることを意識しているのである。古くはアナクサゴラス、ソクラテス、プラトンにみられ、新しくはベルグソンやカイラルをして英米の思想家に多く現われる思想であると思う。

第三、客觀的觀念論は實在を内的情意、生命の表現とみる思想である。これは前二類型とは異り哲學史の全體に亘つて存している。これは瞑想的・靜觀的・藝術的な思想であるということが出来る。われわれの感情が擴大されて世界全體と共感し、生の力が高められる。部分は全體と結合し、美しく統一される。この思想というか氣分はゲーテに於いて最もよく現れている。

— × × × × × —

これまで私は人間自身の動き、働き、知識そのものを深く論研することなしに只現在まで諸學者の動き、働き、而して知識によつて一般に常識的の直觀による人間とそれ以外の自然という事についての理解や解釋又は説明を私が知つてゐる範圍で紹介し、少し許りの私見を述べて來たに過ぎない。併し是等の研究を専門とする諸學者の諸思想と、現に生きて働いてゐる一般大衆の日常生活を靜かに對照してみる時、爲政者、高位高官吏、並びに文學者、教育者の如き所謂インテリゲンチヤとはともかくとして、全世界の幾十億の農村、漁村、鑛山勞働者、下級サラリーマン、産業豫備軍、一般小工商業者、老幼男女の無教育者、未開拓地の土人蕃人等々が果して政治學、經濟學、法律は勿論のこと、物理、化學、數學や又は心理學、論理學尙哲學の如きの知識をもつて生活してゐるであろうか。又知識をもつてゐるとしても毎日の生活にそれを常に意識し考慮して生活してゐるであろうか。人間自身を考えると、自分の職業の立場を認識してゐるであろうか。社會を考え、國家を思い、世界をどのように考へてゐるであろうか。二十餘年の永きにわたり教育にたづさわつて來た私が、最も恐れ且不安に思つたことは、中等學校程度まではまだしも、大學生の中でさへも、或る科目に優秀の成績を點數の上で競つていながら、その科目の人間生活に於ける立場を知ることな

してたゞ機械的に有名學者の説をオームの如く暗記暗誦しているにすぎない状態である。併しそれでも彼等は生活している。嬉びつ、悲しみつ、協力しつ、相争いつ生活している。而も彼等は只衣食住するだけでなく映畫に美術に、音楽にしたしみ、スポーツ、ダンス其の他の競技に夢中に、それこそ狂人的 (fanitic) である。

ラフカーディオ・ハーンは彼の「文學論」の一頁に「此の世の一切の惡は、無知なるところに生づる。」と論ずる。罪惡、迷信、利己主義而して不道德等々は社會性なき即教養なき人々の故に起るものであると彼は叫ぶのである。然らば知とは如何なることか、私は人間の知、それは人間の動きから出發して、働きとなり、知となり、超えては良心となり、悟性も、判斷力も推理力もそして理性も、この人間の動き、働きが向上したものであると信づる。次章勞働論に於いてこのことを論づることにする。

(註)

- 1 「自然科學概論」櫻田總子著、この書は第一編本質論第二編方法論に分ち、第一編の科學と哲學との關係、知識の段階、科學の分類、自然と文化の各節が良く述べられてゐる。
- 2 前書 30p—31p.
- 3 同 33p—34p.
- 4 Rickett: Naturwissenschaft und Kulturwissenschaft (自然科學と文化科學) 邦譯に依る。この書は科學の分類並びに體系について私がおもつとも得るところがあつた書である。
- 5 「自然科學的世界像」石原純著、95p—97p. この書は現在の自然科學の研究が特に物理學が如何なる點まで發達してゐるかを知らるのに役立つた。

5 前書 99p—100p.

7 「反デューリング論」岡村繁譯第二版

8 「科學・哲學・藝術」武谷三男著 14p 15p 16p. この書は、現代最も世界の注目の的になつてゐる理論物理學の原子論についてのその研究が如何なる方法でなされたかについて、武谷氏が唯物史觀的辯證法の下に湯川、坂田兩氏と共に研究した結果であると述べているので非常に興味を引かれる書である。併し武谷氏が自分の學說に確心を持つことは大いに尊敬すべきことであるが、他の學者の思想の批判する場合の言語に何かしら禮儀を失してゐるよう感じられた。日本共產黨員によくみられることである。

9 「ソオイエルバツハ論」エンゲルス著、岩波文庫 50p

10 「ドイツチエ・イデオロギー」マルクス、エンゲルス著、岩波文庫 45p—47p.

11 「哲學・科學・藝術」武谷三男著、47p—49p.

12 「唯物論と經驗批判論」レーニン著、佐野文夫譯（岩波文庫）

13 「共產主義批判全書」共產主義批判研究會編に依る、本書は我が國に於ける最も認められる共產主義批判書であると思ふ。

14 「人間講座」第四卷鬼頭英一「現代の人間觀」233p. 以下參照。

第二章 勞働

第一節 動き

私は前號一部に於いて「一切は動である。」ということを力説した。大宇宙に何一つとして動かざるものは絶対にありえない。それは今日の理論物理学の發達によつて益々實證されて行くように信じられる。私は敢て信づるといふ言葉を用いる。何故かなれば、私は物理學者でもなければ、化學者でもなければ又擴く自然科学者でもなく、たゞ淺學なる一經濟學者であるからである。併し私には例え微弱な頭腦の持主であるとはいえ、人間であればこそその高度の哲學的意味での判斷力、推理力がある。このことは私のみならず偉大なる自然科学者といえども、その學說の大部分は哲學的思考の結果からして生れて來るのだと信づる。「一切は動いている、靜止とは動中の相對的なる一時的の錯覺に過ぎない。肉體的の感覺による人間自身の生活のために要請される結果見られる状態が靜止である。」これが私の根本思想となつてゐるのである。併し其處には多くの私にとつての未知のものがある。それは一切は動であるといふのであるが、動くものは何であるか、自ら動くのであるか、動かされてゐるのか、動きがあればこそ變化もあり、變化があればこそ進化もあり進歩もある。それが因となり差別も生づるのではあるまいか。差別があるからこそ種類も生づるのではないか、而して是等の自然的の動きからこそ時間も考えられ、それが進化發展することにより、無機

物は量から質へと變化し、且遂には有機物となり、尙其の有機物中から植物ともなれば又は動物に進化するものもある。というダーウキンの進化論が表われることとなり、而して最高度に進化した人間が生じたのであると考えることが出来る。而して動くことから時間の觀念が起り、又進化より差別が生ずることにより數や形の觀念が生ずるようになる。つたと考えられる。時間という流れの中に進化しつつ、差別される諸物が生ずるということの中にわれわれは個物が考えられ、やがてはそこに個性とか特種の觀念が生じて歴史の過程に入るのであると考えられるのである。それにしても未だ私に分らないことは、動くもの又は動かされるもの即物質が何であるかということである。このように考えていくと、何か存在するもの即ち現代の哲學的の語でいえばザインとされているものがあると考えられる。故に結局は現代の理論物理が哲學的辯證法による考えからして前述の如く「存在するもの（即ちザイン）一切は物質である」ということが出来るのである。一元であろうと二元であろうと又多元であろうとそのことは今後の自然科学者達の努力、研究の課題となるのである。このような事こそ私において引用した自然科学者石原先生の研究態度であると思う。重複するようであるが大切なが故に今一度先生の言葉を引用すれば「究極なるものを求めてゆくとき、私たちは先づ自分等の生命の棲息する現實の宇宙の大きさと深さとその内容の細かさとに眼を惹かれずにはいられません。あの燦然とした多くの思を包容する天空はどこまで大きく廣いのでありませうか、顕微鏡下に錯雜するいろいろな物質の組織はどこまで細密なのでありませうか、私たちは次いで現象の諸相をながめます。そうしてそのあらゆる變轉を現前する時相は果して何れの遠きに始まりていつまで續いてゆくのでありやと思ひ究めますと、そゞろに神秘の世界を導かれずにはいられません。」私は此の自然科学者の人間らしき敬虔の態度に頭の下るのを禁じ得ない。ニ

ユートンは「余に神秘の扉を開かせ給え。」と毎朝の祈禱を捧げてあのような科學の研究を續けたと聞く、現代の我が國に於て一部の科學者たちが、徒らに自己の科學的知識を信賴することも一應は分るが、むしろ迷信に近い言語を用いて競争とか討論とかならばまだしも常に鬭爭心をもつて相手學者を罵詈罵倒するが如き論文をみることもある。例えその學者の學識そのものには成程と感心するのであるが、何かしら人格的の意味での不快の念が起る。

われわれ經濟學を研究するものは窮極の元素とか原子とか或は電子の如き物質のことに就いては今後の自然科學者の研究にまつことにする。尙併し動きということに關してもより深いことについては理論物理學に於ける現在最も高度に發達しつつあるのであるから常に將來の彼等の研究發表を期待することにする。只われわれは前述の如く森羅萬象一切の自然は動いているということは認めなければならぬと考えることが出来る。私はこの動きが働きに進化し、労働という現在の複雑なる概念にまで發達して來たものであると信づるものである。しかも現在の私の頭には人間の知はこの労働の最高度の發達をしたものだと、いう思想が生じて來ている。いまこのことについて、動↓運動↓労働↓知力という順で自分の考えを論じてみる。

第二節 運動

佛人フーリエ (Fraceis Marie Charles Fourier, 1792—1837) は「四運動および一般運命の理論」の中に運動を次の類別している。註¹⁵

宇宙には四つの運動がある。第一は物質的運動、第二は有機的運動、第三は動物的運動、第四は社會的運動であ

る。これらの四運動をみるに、唯物論者の考えからすれば根本に於いて只物質的運動にすぎないということになるであらう。何故なれば彼等は人間精神も肉體人間に於ける脳髓の細胞の運動によるとされているからである。併しこれらの四運動を一步進んだ唯物史觀の辯證法の見方からすれば、第一の運動から第四の運動へと辯證法的に進化したのであるということを主張することになるであらう。唯物論的の解釋は今日においては恐らく誰れも肯定するものはないであらう。けれども唯物史觀的の見方は多くの學者が認めることになると思われる。運動という語も一般的に物體の空間的位置の變化をいうことを表わし、靜止の對象語とされているのであるが、今日ではその意義も擴充して精神活動にも用いられる。例えば思考の運動というが如し。又精神的に即ち或る主義の下に多數の人が歩調を一にして協力的に活動をなす場合にも運動といつてゐる。例えば倫理運動、社會運動、政治運動等というが如し。又體操、スポーツ等身體の健康のために四肢の或る部分、或は全體を動かすのを運動という。それ故廣く運動を解する時は空間上に限らず、或は一定のものに對して其の位置關係の變化を意味するものといえよう。フリーエの第一の物質的の運動とは、自然現象特に物理化學的現象の中に見られ、第二の有機的運動は生物學の研究する對象に見られ、第三は動物學又は人間學等の研究對象の中に認められるものであり、第四の社會的運動は即ち社會現象の中に認められるものといえよう。各々の運動が無關係に起るとは絶対に考えられない。第四の社會的運動がもと第一の物質的運動から進化したものであるとしても、然しそうだからといつて一切の社會的運動が物質的運動によつて定められるという事は云えないであらう。甲と乙とは關係があるとか、又は甲は乙から進化したものであるということは必ずしも甲は乙に支配されるということにはならない。人間は猿から進化したといつて、故に人間の運動は猿の運動を主とし

て考えられねばならぬということはない。物質的運動から人間の意志的運動が進化して來たのであるから、人間の意志は物質的運動によつて支配されるとは限らない。衣食住の物質のお蔭で人間は生きているからして人間の意志は衣食住に支配されるとは必しもいへ切ることは出来ない。物質的エネルギーが幾億年を経て進化して人間の運動即労働にまで達したのだといえよう。義理、人情とか、良心、悟性、理性とか、時間、空間、因果とかのカテゴリーに至るまで、すべて是等のものを觀念とし、而してそれらの觀念も永年の體驗や經驗を経て物質的エネルギーの進化したのであるといえるかもしれぬ。然し進化とは何を意味するか、進化したものが指導してこそ次のものへと進化するのである。大人は青年より、青年は少年より、少年は幼児より進化發達してきたものである。幼児が種子であり土臺である。それなくして大人はあり得ない。併し進化發達した成人が指導してこそ、社會の進歩もあるのである。又それによつて幼児も發達するのである。物質が種子であつて精神が生れたも一應唯物論並びに唯物史觀の主張を認めよう。併しだからといつて人間という最高のエネルギー的存在物に進化したものが、物質に支配されるということは必ずしもいえない。私は敢えていう「必しも」と。何故なれば支配されることもあり得るからである。併し其の場合は人間の退化である、従つて社會の退化であり、破壊であり、文明の没落である。

心理學者は物理學上の運動と區別して心を有する人間の社會的運動を心理學上から衝動運動、反射運動、本能運動有意運動とをあげている。衝動運動は刺激に應じて一定の運動動觀念を思い浮べ直に運動を存すのをいう。獸類に近い。知識の足らざる意志の弱い人間の運動によく見られることである。われわれは是の如き自覺なきものを行動といつてゐる。反射運動とは刺激に對し何等の感覺又は運動の觀念を伴わずして起るものをいう。塵埃が眼に入りそうに

なつたとき験を閉じるとか、生れてすぐの嬰兒が母の乳房を吸うが如きことをいう。本能運動は豫め運動の目的を考へるようなことなく實行し、しかも複雑な一定の目的をもつというようなものをいう。反射運動と比較して有意識的である。註16 有意的運動は説明するまでもない。註 われわれ人間の運動はかくの如く複雑したものとなつてゐるのである。この運動が労働という語で表言するようになる益々複雑なものとなる。この労働の研究こそ最も今日に必要なことである。これについては特に深く考えて見たいと思う。

第二節 労働

労働はたしか人間の運動より進化したものと云えよう。しかし運動即労働ではない。マーシャル(Alfred Marshall) は彼の經濟學入門 (Elements of Economics of Industry being the first volume of Elements of Economics) で、労働に就いて次の様に述べている。「凡そ労働は全て、或結果を生ぜん爲に行はれる。蓋し例えば、娛樂の爲にする競技の如く、人の活動にしてたゞ其の自體の爲に行わるゝものもあるけれども、しかしこれらのものは、労働の中には入らないのである。ジエヴォンスはよく労働を定義して曰く、凡そ精神または身體の活動にして、これから直接生ずる快樂以外の或福利をば、幾分または専ら自當となして行わるゝものであると。今若しわれわれにして、新たに直して定義をすべしとするならば、全ての労働を以て生産的のもの (nearly all labour is in some sense productive) と見るのが最上であらう」と註17 等しく人間の動き又は運動 (motion) であるけれども。労働は、競技、遊戯等の如き運動其のものを樂しむものと區別されなければならぬ事を云つてゐるのである。

今日、マルクスの經濟思想が擴く而も強く傳播されるようになってから、學者、政治家、學生は勿論のこと、一般インテリゲンチヤといわれるものはすべて、口を開けば、勞働問題とか勞働價值とか又は勞働者の立場等を論じてゐるが、彼等は勞働とは如何なる意味を表はしてゐるか、勞働者とは如何なる範圍のものを云うのであるか。等々を深く考慮してゐるのであらうか。前述の如く、勞働といつても、それは人間自體の、物質的運動を指してゐるのではない。又は獸類の單なる生物的の運動を意味するものでもあるまい。等しく運動の中にあつても、競技や遊戯とは區別しなければならぬ。けれども、最高動物であり良心あり理性あるわれ／＼人間にしても、唯物論者や唯物史觀論者の主張の如く、猿を先祖としてゐるダーウキンの動物である爲であらう、多數の人間の中には、所謂心理學者の云う、衝動的運動、反射的運動又は本能的運動のみに行動してゐるとしか思えない徒輩がある。無學無知なるが故に禽獸に等しき行ひをしてゐるならまだしも、中には、相當の學識を否、凡人以上の學者の立場にありながら、科學的知識の行き過ぎからというか又は錯覺を生じたというのか、自然科學的の即ち、考古學、地質學や理論物理學の發達により、人間の歴史を深く研究し、自然を微細に分析して、人間も猿であり、アミーバであり、結局物質の塊であるかの如く考へ、幾億年をも經て進化せる、人間の意思力、理性、判斷力等を單なる物質の模寫にすぎないとして、一切の觀念を空想的なる夢にすぎないかの如く輕視してゐるとしか思えない學者が居る。彼等自身の生活又は主張に矛盾のあることを知らないであらうか。何故なれば、百年前にマルクスが、「必然的に崩潰する」と叫んだ高度の資本主義のアメリカ、英國又は其の他の國々に於いて、未だに續いてゐる資本主義、而も其の環境に生れ、生活してゐながら、彼は共產主義を意識して、現在の資本主義を種々様々な手段によつて破壊せんと努力してゐるのではないか。

例へば身は牢獄にしばらくと、雨の日も、風の日も、驛頭に赤旗を振る學生、これこそ或る意味での人間の意思が歴史を環境を改革せんとする努力ではないか。彼等は人間的の理性、良心、平等の觀念を抱くが故に、それが主體となつて、運動してゐるのではあるまいか。運動してゐるのではなからうか。自然的の流れには、偶然性を伴ふ、差別、不平等は必ずあるものだ。ダーウキンの自然淘汰はそれを示してゐるではないか。かゝる自然的必然的の流れから生ずる差別、不平等の中にありながら、公平とか平等化せんとする運動こそは、人間の良心、理性、判斷力等の如き所謂精神力でなければならぬ。又私はその意味に於て、その様な運動には賛意を有するものである。徒らに唯物史觀の辯證法を絶對視するなかれ。私見をもつて云えば唯物史觀そのものも矢張り人間の生んだ觀念論の一である。だからこそその觀念論も現實に適用する時の手段如何によつては、成功もすれば失敗もする。マルクス主義者よ！ 只信ぜよ。「労働は價値を産む！ 労働せざるものは食うべからず！」というマルクスの金言を、唯物史觀、辯證法は一種のマルキシズムの形容詞が副詞の役目をそれも時と場合によつて役にも立てば損にもなる哲學的の觀念にすぎない。人間は知、情、意の必然的進化による天性によつて毎日々々を行えばそれで價値を産むものだ。行えば必ず通ず。労働すれば必ず價値は生れる。それであればこそ私は特に労働についての研究が必要であるといふのである。一見労働は如何なることかは誰でも分つてゐるようであるけれども、しかしこれは最も複雑な概念を包んでゐると思ふ。何故なれば、人間の知識の發達によつて労働そのものが進化したからである。物質的エネルギーの意味での運動であるならば、一時間の運動は數量的に確實に計ることも出来よう。そしてマルクスの労働價値も、社會的平均労働で解決出来よう。しかし無知のものと、有知のものとの一時間の運動の結果が等價でないことは誰でも分るであらう。

これは何故か、労働が物質的運動ではないからである。このことは今日までの経済學で筋肉労働と精神労働とに分けて説明していることでも分る。いま経済史的に労働を考えてみても労働という語は二字で何等變りはないとしてもその概念を考えて見ると時と場所によつて大いに變つてゐる。原始時代には人間の動き即運動であり労働であつたといえる。否動物的の動きにすぎず労働という概念も生じていなかったであらう。人口が増加し人知が發達し分業が起ることによつて、必然的に動きと、運動、英語でよくいう Motion と Movement の區別も生じて來たのである。又もつと人間社會が進化發達した所謂文明社會になると、益々分業が起り Motion が Movement となりやがては Labour で表言せざるをえなくなり Sports, Game. などと區別をしなければならなくなつたといえよう。そればかりではない。高度に科學が發達してくると、即ち、人知が發達して單なる器具が複雑精巧なる機械が發明されて、自然力即ち引力、風力、電力、水力等が應用されると、労働はこれらの知力のお蔭でスキツチを押せばあとは手を動かしさえすれば（殆んど運動又は動きといつてもよいほど簡單である）知力の産物である機械が人間の筋肉労働に代つて生産してくれることになるのである。この様にして極度に發達して機械が機械を生産するとなれば、労働は殆んど精神労働即知力だけだともいえるのではないだらうか。

第四節 精神労働——知力の節は本號の頁數の關係で、中途で甚だ意に滿たないが、此所でカットして次號に載せることにした。従つて（註）も第四節の終りに付けることにした。